

五塚原古墳第5次発掘調査 現地説明会資料

(1) ごあいさつ

五塚原古墳は、京都府向日市寺戸に所在する全長約90mを測る大型の前方後円墳です。墳形などから日本列島最古級の前方後円墳と推測され、古墳やヤマト政権が誕生した経緯を解明する鍵を握る古墳として、多くの研究者に注目されています。また、向日丘陵には元稲荷古墳・寺戸大塚古墳・妙見山古墳といった100m前後の大型古墳が累代的に造営されており、向日丘陵古墳群とよばれています。この古墳群は、3～4世紀代における本地域の首長墓系譜を明らかにする絶好の資料になっています。

そのため、本古墳群は古くから発掘されてきました。しかし、五塚原古墳は例外的に発掘調査が遅れ、2000～2001年によく立命館大学によって発掘調査の鍬が入れられました。その後10数年の空白期間をはさんで、昨年夏に向日市埋蔵文化財センターと立命館大学考古学・文化遺産専攻が、それぞれくびれ部と後円部斜面・墳丘周辺遺構の発掘調査を実施し、興味深い成果が挙がりました。

昨夏に続いて今夏も、立命館大学考古学・文化遺産専攻が、8月1日から同29日にかけて、本古墳の第5次発掘調査を実施いたしました。今次の調査では、(1)前方部墳頂部の方形壇状施設の有無およびその構造、(2)前方部墳頂部における埋葬施設の有無、(3)前方部墳頂部における土器集積遺構などの祭祀施設の有無、(4)後円部斜面の段築・葺石の施工法と後円部の形状および規格、などの解明を主目的に据えました。

異常気象ともいえる多雨にも負けず、今次の調査ではいっそう重要な成果を数多く得ております。併行して調査を実施している向日市埋蔵文化財センターと同時に現地説明会を開催し、より総合的に調査成果を公開するために、発掘終了から1ヶ月半ほど期間を空けており、安全確保と遺構保全のため、後円部トレンチ・前方部墳端トレンチ・くびれ部トレンチはすでに埋め戻しております。なにとぞご海容下さい。

本調査にあたり、寺戸財産区・向日市教育委員会・向日市埋蔵文化財センターの方々から多大なご支援を賜りましたことに厚く感謝申し上げます。(下垣)

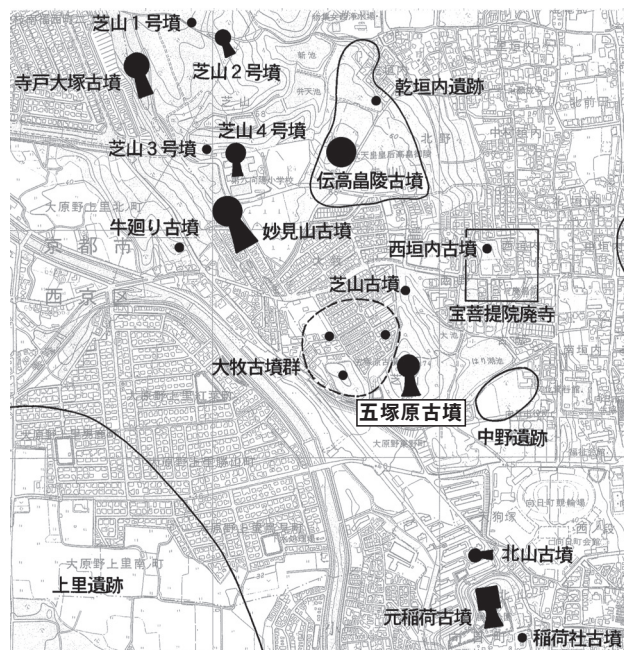


図1 五塚原古墳の位置

(2) 五塚原古墳と向日丘陵

京都盆地の西部を流れる桂川、その右岸中央に広がる向日丘陵一帯には、古墳時代を通して数多くの古墳が築かれています。五塚原古墳は、丘陵のなかでも東側の眺望が開け、京都盆地を一望できる位置につくられています。

五塚原古墳は、細いくびれ部から前方部がバチ状に開くという特徴をもっています。こうした古墳の形状は、前期古墳の中でも古い古墳に目立ってみられます。そのため、向日丘陵で最も古い古墳の可能性があり。ただし、築造時期のわかるような遺物が出土しておらず、元稲荷古墳に先行するという現在の見解を裏付ける遺物の出土が期待されます。(藤原)

(3) 調査成果

1. 後 円 部

① 上 段 (P4 写真1 1・2)

4次調査では、遺存状態が良好ではなく、^{きていせき}基底石(根石)を検出できませんでした。今回の調査では、上段の基底石を検出する目的で、前年度の調査区に重複させつつ、樹木を避けて南北に2箇所の調査区を設定しました。

調査の結果、基底石列と平坦面の^{れきじき}礫敷を良好に検出できました。葺石の石材は、基底石が隅丸三角形で人頭大かそれより小さな石材、それより上の葺石は拳大ほどの大きさの石が選択されていました。基底石は長軸を墳丘斜面に平行させて、斜面に立てかけるように据えます。葺石は石の長軸を斜面と直交させるようにして積み上げる「^{こくちづ}小口積み」を志向しています。葺石の傾斜勾配は、基底石は急角度ですが、それより上は角度がゆるくなります。基底石を設置した標高は65.4mで、これは第1・2次調査で検出した上段基底石の設置標高65.7mより約30cm低くなっています。

また、基底石を設置したのちに、礫敷を設置するという構築順序が確認できました。礫敷には拳大の石材が用いられています。(小平・三浦)

② 中 段 (P4 写真1 3・4)

4次調査では、調査区内に生えた木を避けたため調査面積が狭くなり、基底石を検出できませんでした。今回の調査では、前年度の調査区から北東へ約1.5m拡張しました。

調査の結果、基底石列と平坦面の礫敷を良好に検出できました。葺石の石材は、基底石が隅丸三角形で人頭大、それより上の葺石は拳大から基底石よりやや小ぶりの石が選択されていました。基底石は長軸を墳丘斜面に平行させて斜面に立てかけるように据え、葺石は上段と同様に小口積みを志向しています。葺石の傾斜勾配は、基底石とその上数石までは急角度で、それより上は角度がゆるくなります。基底石を設置した標高は62.9mで、これは第1・2次調査で検出した中段基底石の設置標高63.7mより約80cm低くなっています。

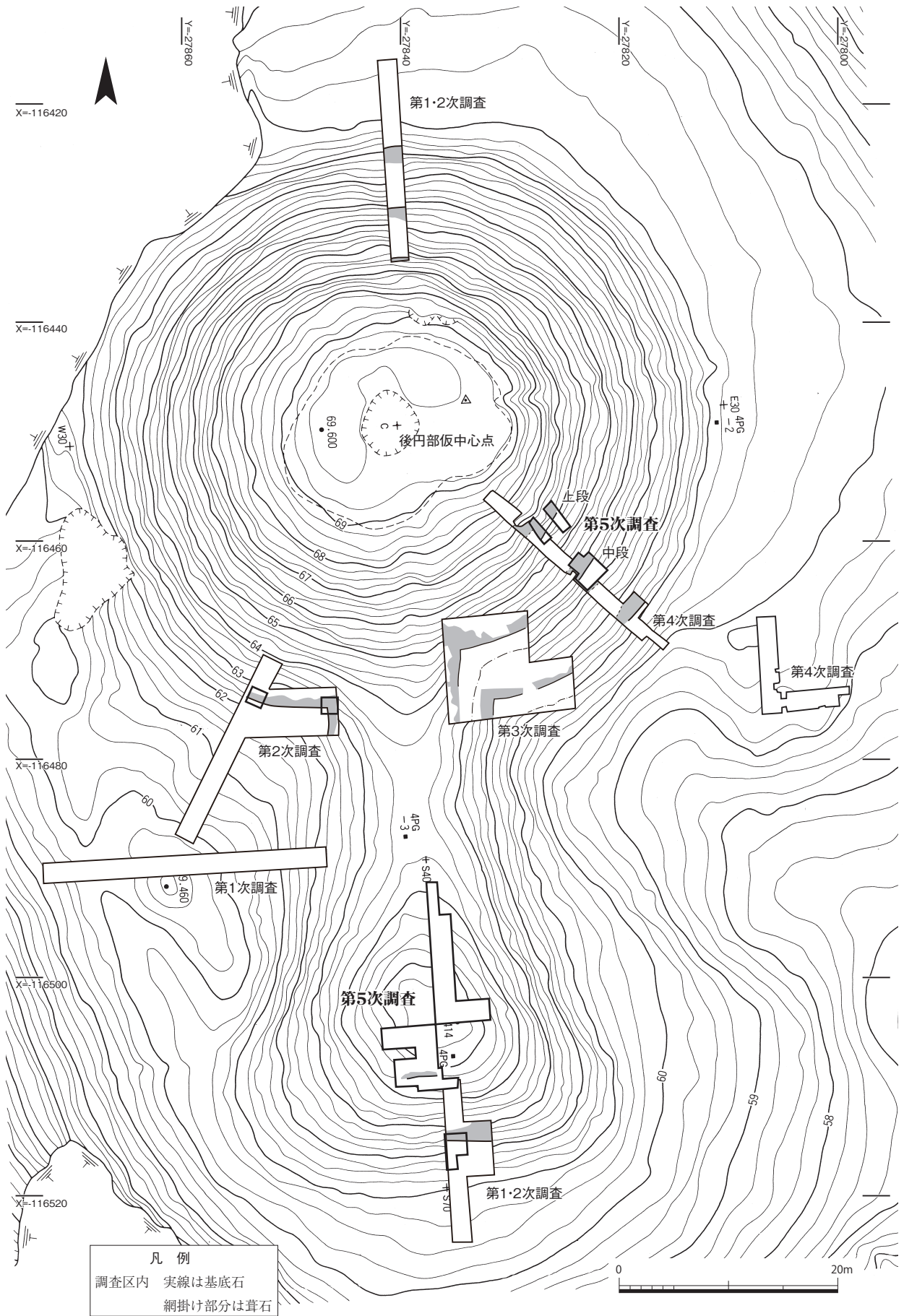


図2 墳丘測量図と調査区配置図 (1/500)



1 後円部上段南側



2 後円部上段北側



3 後円部中段（正面）



4 後円部中段（側面）



5 前方部頂（北西から）



6 前方部頂盛土構築状況（北東から）



7 前方部上段（南から）



8 前方部上段（南西から）

写真1 各調査区の遺構検出状況

今回の調査では、古墳完成時の葺石表面の奥からも、石積みを検出しました。奥に使用されている石材の中には、径 20cm を超える大ぶりの石材もみられます。このことから、他の箇所 비해、より強固に石積みを行っていた可能性があります。五塚原古墳の葺石の構造を考える上で新しい情報が得られました。

平坦面の礫敷は、基底石を据えたのちに設置されていることが確認できました。礫敷に使用された石材は径 5 cm 程度で大きさがそろっています。(辻村・吉村)

2. 前 方 部

前方部頂では、方形壇状施設や埋葬施設、祭祀施設の有無を確認する目的で、幅 2 m の L 字形の調査区を 2 つ組み合わせて設定しました。

①前方部前面 (P4 写真1 7・8)

2000・2001 年の立命館大学の調査では、前方部前面には段築が認められないものの、墳頂部付近で礫群を検出したため、方形壇の可能性も考えられていました。そこで今回の調査では、この礫群の性格を明らかにするために、旧調査区の一部を再発掘して土層を確認した上で、調査を行いました。

その結果、基底石と葺石、平坦面の礫敷を検出できました。これらが段築にともなうものなのか、方形壇の一部であるのかについては、この調査区だけでは判断できませんでした。しかし、向日市埋蔵文化財センターの調査区の成果と総合して考えると、段築と判断できます。五塚原古墳の前方部には段築がないとされていましたが、前方部が 2 段からなることが判明しました。

今回検出した基底石の設置面標高は 64.4m で、前端裾の基底石の設置標高は 61.3m で、約 3 m の高低差があります。後円部各段の標高差が約 2 m なので、前方部の前面の段築はいつそう高くなっていたことがわかります。

さて葺石・礫敷に使用された石材は、基底石が 15～20cm 程度、葺石が 5～10cm 程度、礫敷が 5 cm 程度で、五塚原古墳の中で最小サイズです。一方、葺石の施工法は他の箇所と同様で、基底石は斜面に立てかけるようにして据え、葺石は小口積みがなされています。葺石の傾斜角は、基底石から 2・3 石は急角度で立ち上がり、それより上はゆるやかな傾斜に変わるという特徴がみられます。

②前方部頂 (P4 写真1 5・6)

前方部頂は 1960 年代に行われた電気探査で、東西 5 m・南北 7 m の墓坑^{ぼこう} (墓穴) が存在するとされてきました。2001 年に再度、電気探査とレーダー探査を実施したところ、主軸方向に溝状の構造の存在が推定され、くびれ部側は現在よりも急斜面であった可能性が推定されていました。

探査の結果から、前方部頂には埋葬施設や何らかの構造物が存在する可能性があったため、まずは墳頂の精査を行いました。その結果、平面では掘り込みの痕跡はみられず、盗掘を受けていないことがわかりました。

そこでサブトレンチを設定し、一定の深さごとに記録をとりながら徐々に慎重に掘り下げていきました。掘り下げていったサブトレンチの平面と土層を詳細に観察しましたが、調査区内に埋葬施設はないことがわかりました。小規模な埋葬施設が調査区外に存在していないとも限りませんので、前

方部に埋葬施設がないとは断言するには、今後の調査に期待しなければなりません。

埋葬施設を検出しなかったかわりに、墳丘を構築していく際の盛土の方法が明らかになりました。盛土の手順を復原すると以下ようになります。

- ①調査区南東に核となる山状の盛り土を行う。
- ②この山を中心に各方向に土を盛り上げていく。この際、礫を多く含む土と、礫を含まず粒が均質な土とを交互に積み、墳丘の表面には、礫を含まない粒の均質な土を選択する。
- ③その上部には礫敷を設置する。
- ④前面の葺石設置にあたって、一部盛土を切り込んで、葺石を構築しながらその背後に土を詰めていく。

墳頂の礫敷は調査区のくびれ部側から前方部頂の平坦な部分に到達する直前まで検出しています。墳頂平坦面に礫敷は確認できませんが、サブトレンチの観察結果からこの部分は礫敷と墳丘盛土の一部が消失していると考えられます。これは、2001年の探査で前方部頂の後円部側は本来もう少し急な斜面であったという成果と同様の結果であることから裏付けられます。

また、古墳の表面を観察すると、前方部頂では後円部との接続部分まで礫が顔をのぞかせている様子がみられます。今回検出した礫敷は、墳丘盛土の直上に設置されていることが確実なので、古墳築造当時のものと判断でき、この礫敷は前方部頂全面に設置されていたものと考えられます。

(原田・藤原・井内・長池)

(4) まとめ

1. 後円部各段の形状について

これまでの調査で判明した後円部後端・後円部南東・くびれ部の各段の標高は表2の通りになります。

上段・中段は、後円部後端からくびれ部に向かって標高が低くなります。一方、下段は後円部後端からくびれ部に向かって標高が高くなります。上段・下段の標高差は40cm前後なのに対し、中段では1m近い標高差があります。

後円部の平面形は、上段・中段・下段いずれも正円ではなく東西に長い楕円形を呈する可能性が高まりました(表1)。正円を描かない前方後円墳は、やせ尾根上に自然地形を削り出して築造する古墳に多くみられます。しかし、本古墳は平坦な尾根上に基底から盛土で築造した古墳です。

どのような設計図が用いられ、実際にどのような測量技術で造営されたのかは今後の検討課題です。

(角)

2. 今回の調査成果

今次の調査では、以下の点が明らかになったといえます。

まず後円部は、正円にはならず東西に長い楕円形になる可能性が高まりました。測量図を読み解いても後円部の中心点が眺望のきく東側にかたよっているというわけではないので、築造当初から楕円形であった可能性があります。

表1 仮の後円部中心点からの距離 (m)

	後円部後端	後円部南東	東くびれ部	東くびれ部東	西くびれ部	西くびれ部西
上 段	15.5	16.7 ~ 16.8	-	-	-	-
中 段	20.0	21.8	21.3	22.0	-	-
下 段	26.0	27.8	26.5	27.8	26.4	28.1

表2 後円部各段の標高 (m)

	後円部後端	後円部南東	東くびれ部	東くびれ部東	西くびれ部	西くびれ部西
上 段	65.7	65.3	-	-	-	-
中 段	63.7	62.9	63.5	62.9	-	-
下 段	61.0	60.9	61.0	60.8	61.9	61.7

表3 前方部各段の標高 (m)

	東くびれ部	東くびれ部南	西くびれ部	西くびれ部南	前方部前段
上 段	-	-	-	-	64.4
下 段	60.9	61.0	62.0	61.8	61.3

真上からみてきれいな正円ではないとはいえ、東側から五塚原古墳をみると、後円部の裾から前方部の裾までがほぼ同じ標高でめぐっていることを確認できます。これは、当時の高い測量技術が反映されているといえます。裾はほぼ水平に築かれますが、中段や上段は現時点では標高差が目立ち、波打つように平坦面がめぐっていきそうです。なぜ上に行くほど歪んでいくのかについては今後の調査が必要です。

次に、前方部で段築を確認しました。今回の調査までは前方部に段築はないとされていなかったので、大きな進展といえます。また、前方部頂の平坦面に礫があった可能性が高いですが、何らかの原因で消失したという点も明らかになりました。向日市埋蔵文化財センターの成果とあわせて、前方部の形状についてはより確かな復原を目指していきたいと考えています。

そして葺石と礫敷については、これまでの調査成果と同様の方法で構築されていることがあらためて確認できました。その特徴は、基底石に大型の石材を長軸をタテにして墳丘斜面に立てかけるように据え、その上に拳大の石材を小口積みをしていくことです。基底石から数石は急角度で積み上げ、その上はややゆるやかになります。基底石の施工後に、拳大の石で礫敷を設置しています。このような施工が五塚原古墳のどの部分でも確認でき、一貫した施工管理が想定できます。つくられた当時は葺石・礫敷で一面が石の山のようにみえたことでしょう。

さて、今回の調査で特筆すべきは、前方部頂に主軸を意識した大規模な埋葬施設がないことを確認したという点です。埋葬施設を検出なかったものの、古墳をつくる時に、どのような手順で土を盛っていたかがわかりました。初期の前方後円墳で、古墳のつくり方がわかっている類例はほとんどありません。

今後は、これらの成果をより詳細に分析していきたいと考えています。 (原田)

【参考文献】

- 梅本康広 2014「長岡京跡右京第1062次（7 ANBSM—3地区） 五塚原古墳第3次（4 PFBSM—3地区） ～右京一条二坊八町、東くびれ部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第100集 向日市教育委員会
- 和田晴吾・高正龍・廣瀬覚（編） 2003『五塚原古墳第1・2次発掘調査概報』（『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第10冊） 立命館大学文学部
- 原田昌浩（編） 2014『五塚原古墳第4次発掘調査概報』（『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第16冊） 立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻

※前方部の段築の評価については、向日市教育委員会・公益財団法人向日市埋蔵文化財センターより、第6次発掘調査成果の一部の提供を受けました。

※表および図の作成に際して、上記文献より引用・改変しております。

※本現説資料で提示した情報は、今後の検討によって変更する可能性があります。つきましては、資料・図面の引用・転載はご遠慮願います。

五塚原古墳第5次発掘調査 現地説明会資料

発行日	2014年10月18日
編集・発行	立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻 〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町56-1 Tel/FAX 075-466-3493 E-mail rits_arc@hotmail.co.jp
調査担当	下垣仁志（立命館大学准教授）・原田昌浩（同博士課程大学院生）
執筆	角早季子・辻村公亮・藤原怜史・井内紳基・小平典子・才治朋子・三浦悠葵・山崎京香・吉村慎太郎（立命館大学学生）・長池嗣則（同志社大学学生）